

琉球大学学術リポジトリ

民話の再話に関する教授学的考察

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-07-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤原, 幸男, Fujiwara, Yukio メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/1108

民話の再話に関する教授学的考察

藤原 幸男

A Didactical Analysis about a Retaled Folkstale

Yukio FUJIWARA

In this paper I analysed the process of folkstale in order to explain the relation subject matter theory and teaching theory. Especially, I analysed how the original folkstale was transformed in the good retaled folkstale, what was the folkstales' mind, and which suggestion gave the retale process of the original folkstale in teaching leadership.

はじめに

「教材論」と「授業論」は区別されなければならないと言われる。両者を区別することでそれぞれの理論的發展が生みだされてきたのは確かである。しかし、「教材論」「授業論」のそれぞれの独自性が強調されるあまり、逆に両者の関連が軽視される傾向があるように思われる。良い教材であれば、そこからすぐれた文化的・教育的価値がただちにひきだされ、すぐれた授業になるとは言えない。しかし、良い教材のなかには授業指導の契機がふくまれてはいないか。また、教師が良い教材を選択・構成する行為のなかに授業創造の契機がふくまれてはいないか。こう考えると、教材の選択・構成のレベルで両者の関連を追究することは、「教材論」「授業論」のいっそうの発展にとって重要なことだと思われる。

本稿では、民話教材を一つの事例として取り上げ、上記のことを具体的に検討したい。とりわけ、①原話はいかにすればすぐれた民話作品となるか、②民話の再話における「民話の精神」の発見とは何か、③民話の再話・再創造過程は授業指導にどんな示唆をあたえるのか、などを検討することにしたい。

1 教材文化としての民話

これらの検討にはいる前に、授業研究史における民話教材の位置、民話の教材文化性に触れてお

かねばならないだろう。

60年代初め砂沢喜代次(当時、北海道大)の提唱により五大学共同研究が開始され、これを契機として全授研(全国授業研究協議会)が結成された。こうして、研究者と現場教師とで協力して授業研究にとりくむ体制が全国的規模でできあがったのである。全授研の授業研究運動のなかで指摘され確認されてきたことの一つは、教科書の文学教材が改作され重要な表現が欠落している場合には、どんなに教師が頑張っても、切実な文学体験が子どもたちに成立せず、道徳的教訓に陥ってしまいがちだということであった。

たとえば1962年に実施された五大学共同研究では、共通教材としてドーデーの「最後の授業」(学校図書版)を扱ったが、岩波文庫版(原作)と比較・対照してみると、学校図書版では、フランス語についてアメル先生が生徒たちに物語るやまばの場面で、「民族と言語の関係についてはきりのべている教師のことが削除され」ており、これでは「国語をうばわれることの意味が読み手に伝わらないし、言語と民族の問題について考えさせることもできない」と指摘された。⁽¹⁾

五大学共同研究に参加した広島大グループも、授業目標を達成するには、「物語の世界が、読み手である子どもたちに、生き生きと追体験できるように、リアリスティックに表現されていなければならない」、「敗戦による、民族と民族、国家と

国家との、非合理的な支配・被支配の関係がリアリティに、じゅうぶんな緊迫感をもって表現されていなければならない」、「国語と民族とのきりはなすことのできない関係が、この物語のなかでとらえられ、表現されていなければならない」という三条件を満たす必要があるが、この点で学校図書版の教科書教材は重大な欠陥があり、子どものつまずきの多くは教材の不備に帰因すると指摘した。⁽²⁾

ここで指摘されたように、原作に帰ることの重要性は今日においても基本的に妥当する。文学作品それ自体がひとつのまとまった「文学の世界」をもっているわけで、それを改作することは教材の文学的・芸術的価値をそこなうことになるのである。⁽³⁾このことは、民話（再話）の教材化にとって貴重な教訓であった。

第4回全授研大会（1967年10月2～3日、於、広島県庄原市および比婆郡東城町）で、民話教材「かもとりごんべえ」（教科書教材）による授業研究が公開された。指導書ではそれは、「人間のもっている欲への、限りない望みが結局は、わが身をほろぼすことになることの寓意を潜めている」説話であるが、「これを表面だって強調することは、さしひかえるべきで、それよりも、空高く上り、かもと化したことのおもしろさにふれさせたい」とされている。教師もこの点に共感し、教訓的・説話的取り扱いに疑問を持ち、「人間としてのごんべえ」を理解させようとしたが、「教材自体が寓意的構造になっていて、ねらいを達成するのは困難ではないか」と授業分析者（小田切正）は述べている。授業をした学級では子どもが学習主体として育っているために、教訓的把握に疑問をもつ子どもが出ており、授業はごんべえが「反省する」——「反省しない」をめぐる続いた。その結果、教訓や道徳の型はめとはならなかったが、しかしそれにこだわっている子どももおり、授業者としては立ち往生することとなった。⁽⁴⁾ここでも、教材の文学的・芸術的価値を見きわめ、文章の叙述・表現が授業者のねらいにそうものであるかどうかを分析することが重要であることが明らかにされたのである。こうした帰結が単なる教科書分析からだけでなく、授業の事実からも分析された点で重要であり、貴重な教訓となりえてい

る。

70年代にはいって低学力と非行が急増し、深刻化してきた。竹内常一は、その原因の一つは教材文化の貧困にあるとし、教材文化の豊かさをどう創出するかが緊急的課題である、と問題提起した。

「子どもたちは教材文化的肉体をもたない骨だけの教科内容を詰めこまれ、その結果、おちこぼれ・低学力という事態にたたきこまれるとともに、ヘソ痛・学校ざらい・ながら族的学習体質などの病的事態のなかにおこまれたのである。／だからこそ、70年代民間教育運動はこうした問題状況を突破していくために、地域にねざした豊かな教材文化の創造へと向かったのである。そのなかで共通に確認されたのは、教科の系統性のもとで精選された教科内容を教えるためには、子どもの生活と発達にかなった豊かな教材・教具文化を創出しなければならないということであった。」⁽⁵⁾（斜線は改行を示す、以下同様）

この指摘は重要である。教材の選択・構成において教材文化の豊かさにつねに留意しなければならないことを訴えているからである。

民話教材に限って言えば、木下順二『日本民話選』を出発点として、次表⁽⁶⁾でみるように、60年代以降、「民話の会」につらなるメンバーを中心に文学性・芸術性豊かな本格的な再話がたくさん創出されてきた。この20年間に相当な質的変化がみられる。これは、民話の再話それ自体が独自の価値をもつようになってきたことの証拠である。文学性・芸術性豊かな再話は、今では教科書の中にも取り込まれてきている。⁽⁷⁾

このことはまた、すぐれた民話教材による授業実践の機会が増えることになるわけで、適切な指導がなされれば「民話の世界」に子どもがひとり得ることを示している。したがって、これらの民話教材にひそむ「民話の世界」を教師がどうとらえ、どう指導するかが課題となるのである。

反面、今日では、同じテーマであっても多種の再話が市販されており、再話の質を見きわめる眼と力量が、「読書指導」としても現場教師に要請されているのは事実である。こうした力量を得るためには、さきに設定した三点について究明し、再話の選択についての確かな視点を教師が手に入れなければならないのである。

表1 戦後日本民話年表(再話、再創造を含む)

一九五八	12月	木下順二「日本民話選」(岩波書店)
一九六〇	8月	松谷みよ子「龍の子太郎」(講談社)
一九六二	11月	木下順二「わらしべ長者」(岩波書店)
一九六七	5月	松谷みよ子文・瀬川康男絵「やまんばのしき」(ポプラ社) この作品を含む「むかしむかし絵本」の刊行はじまる
同	11月	斎藤隆介「八郎」(福音館書店)
同	11月	斎藤隆介「ペロ出しチョンマ」(理論社)
同	11月	松谷みよ子「日本のむかし話」(講談社) 全三巻の刊行はじまる
一九六八	5月	大川悦生文・遠藤てるよ絵「いっすんぼうし」
一九六九	12月	大川悦生「おかあさんの木」(ポプラ社)
同	12月	大川悦生文・福田庄助絵「あほう村の九助」(ポプラ社)
同	12月	斎藤隆介文・滝平二郎絵「花さき山」(岩波書店)
一九七一	3月	儀間比呂志文・絵「ふなひき太良」(岩波書店)
一九七一	11月	岸武雄「炭やきの辰」(偕成社)
一九七二	2月	さねとうあきら「地べたっこさま」(理論社)

2 「民話の会」の民話観

今日では民話ということばはよく聞かれるようになり、耳新しいことばではなくなった。しかし、戦後「民話の会」を中心として民話運動が提唱されるまでは、「昔話」という言い方が一般的であった。「民話の会」の民話のとらえ方には従来の「昔話」観をこえて、一定の問題提起的な意味合いがあったのである。

「民話の会」は、「木下順二の戯曲『夕鶴』」の上演をきっかけとして、民族の遺産としての民話を、あたらしく見なおし、今日の課題にそくして、民話の研究と創造をすすめるようとして⁽⁸⁾1952年に発足した。木下順二は、「民話の会」の著作『民話の発見』(1956年)のなかで次のように述べている。

「『民話』ということばに、民俗学でいう『昔話』と『伝説』と、それから『世間話』をまで含ませてよかろうと私は考えるのである。……こ

れらの区別は、昔からのさまざまななしを分類整理してその意味を明らかにするためにも、必要であることはまちがいない。だが私は、まずその前にこれらのすべてを一括して、そこにこめられている無数の名もない民衆の切実な感情とすぐれた知恵とを問題にする。これらの話を素材にして戯曲を書く時、それらを語りつたえて来た無数の名もないわれわれの祖先たちと合作するという意識が、常に私の中にある。」⁽⁹⁾(傍点は引用者、……は中略の意味、以下同様)

ここで重要なのは、「民話」という場合には忠実な伝承が問題なのでなく、伝承にこめられた「民衆の切実な感情とすぐれた知恵」をどう発展的に継承するかである。そのために木下は、自分なりの文学的感覚で「民話の発見」をし、「祖先たちと合作する」のである。ここに民話の再話、あるいは再創造といった問題がでてくるのである。

合作は、原話と離れた全くの創造ではない。それは、これまで伝承されてきた「昔話」「伝説」「世間話」の内容と、それに関わる学問的区別をもとにして成立する。

木下によれば、「合作するのだが、するについては一つ一つのはなしの意味は何だろうと考える場合に至ってはじめてあの学問上の区別が私の役に立つ。だから学問のおかげを、つまり区分のおかげを私も十分に受けてはいるのだが、その上で作品をつくるという時の私の意識の中では三つの間の区別などなく、そこで三つをひっくるめて『民話』と私は呼ぶのである。」⁽¹⁰⁾しかも単なる伝承ではない。木下によれば、「『昔話』がこれまで語りつたえられて来たはなしであるに対して、『民話』はそのことプラス、これからつくり出されて行くはなしという内容を持つ」⁽¹¹⁾のである。

木下は次のようにも言っている。

「20世紀において、昔からあるがままの『昔話』は、もはやエネルギーを持たない『昔の話』になってしまっている。それは社会を推し進めて行くための新しい力を持った『民話』として、現代の人々の感情と知恵とをその中にこめながら新しくつくり出されなければならない。さきほどのことばをここにも当てはめていうならば、私は現代の民衆とも合作しなければならぬのである。その場合、いわゆる『現代劇』を書くのとはちがった

意識が、創作過程の中に含まれて来るのは当然だといえるだろう」⁽⁴²⁾

「民話劇の創造は、もしそこですぐれた作品が作り出されるなら、過去代々の民衆と現代の民衆との合作の契機、合作によって新しい日本の文化をつくり出して来る契機になるはずのものだということがいえるだろう」⁽⁴³⁾

過去と現代の民衆の合作による新しい日本文化の創造という問題意識をもって、木下はあの有名な民話劇「夕鶴」を生み出したのである。さらに『日本民話選』において、「かにむかし」「こぶとり」「なら梨とり」などの「民話の再話・再創造」を試みたのである。

なお木下は、「再話」「再創造」ということには厳密な検討が必要だと言っている。木下自身は『英国民話集』の例をひきながら、「再話」とは、「農民特有の魅力的な語りくちを可能なかぎり文体の中に生かしながら、話の内容についても教訓その他の目的的な解釈をあとからつけ加えたりせず、できるだけ文学的密度の高い作品をつくりだすことだとしている。これに対して、「再創造とは、民話を素材としてはいるが、解釈にも表現にも作者が作者自身のものを自由に駆使した場合」だとしている⁽⁴⁴⁾。両者にはこのような区別がなされていることに、注目する必要があるだろう。

「民話の会」に結集した人々は、木下順二の「民話観」とほぼ共通した認識をもっていた。こうした問題認識をもって「民話の再話・再創造」を手がけ、新しい日本文化の創出に寄与しようとしたのである。「民話の会」は機関誌『民話』を1958年10月に発刊したが、創刊の辞「新しい日本文化のために」に当初の意図がこめられている。以下、それを一部引用しておきたい。

「『民話の会』の機関誌が創刊されることになった。機関誌『民話』の目的は会独自のそれと同じで、手短かにいうならば新しい日本文化の創造、その問題を民話を通して考えかつ実践して行きたい、ということに尽きる。

まず民話を、スパートニクの飛んでいる現代と切りはなさずに考えるという姿勢を持つこと。しかしそのためには、古い伝統・文化遺産としての民話を一方で十分大切にみつかることが忘れられてはならないだろう。同時にまた、民話というも

の内容をいたずらに狭く考えないこと。そしてそのためには、文化全般に対する広い視野の中に民話を置いて眺める態度が忘れられてはならないだろう。さらに民話についての厳密な民俗学的、歴史学的研究が重要であるのと同時に、民話的精神や民話的心情、民衆の知恵の結晶としての民話、そういう面へのせん細な柔軟なそして鋭い理解と感覚も、また忘れられてはならないだろう。」⁽⁴⁵⁾

機関誌『民話』は残念ながら24号（1960年9月）で終刊となり、会自体も1961年で閉会となった⁽⁴⁶⁾。しかしその成果は、とりわけ60年代後半における松谷みよ子、大川悦生、西郷竹彦などの再話に現われていった。

3 民話の再話・再創造過程

すでに述べたように、「民話の会」を中心とした民話把握では、言い伝えの忠実な伝承ではなく、その創造的・発展的継承こそが問題となる。教材論の次元に引きよせて表現するならば、そこには、原話の民話作品化という問題がひそんでいる。ここではこの問題を、「民話の会」に連なると思われる作家の再話・再創造過程を分析することによって明らかにしたい。素材としては、すぐれた編集者でもあり民話絵本の作家でもある松居直、民話の探訪にもとづきすぐれた再話を発表してきた松谷みよ子、文芸学研究の視点から民話の再話にとりくんできた西郷竹彦の場合をとりあげ検討したい。

(1) 松居直の場合

松居直は月刊絵本『子どものとも』誌の編集にたずさわりながら、その仕事と並行して『だいくとおにろく』『こぶじいさま』『ももたろう』などの再話にとりくみ、すぐれた仕事を残している。彼は、『絵本をみる眼』（日本エディタースクール出版部、1978年）に「絵本『ももたろう』の誕生」という興味深い論稿を書き、絵本『ももたろう』の作成過程を自ら語っており、本テーマと関わって興味深い。以下、それをもとにしながら論述したい。

「桃太郎」は戦前の代表的な昔話であったが、当時（1960年ごろ）にあって「桃太郎」はほとんど取り上げられず、絵本らしい絵本はなかった。

「桃太郎」の話は時の政治や権力に動かされてきた。戦後しばらくは、その勧善懲悪的・軍国主義的色彩のために返って語られなくなったのである。

それにしても、「桃太郎」の話はみんなよく知っていたが、語れといわれるとうまく語れない。そこには、「桃太郎」の伝承に何らかの弱さがあるのではないかと松居は考えた。木下順二の民話劇や再話の仕事をとおして、民衆のなかでの昔話の表現と伝承の意味を見直していく。この過程で「桃太郎」の再話にぶつかったのである。彼は日本各地で伝えられている「桃太郎」を読み較べてみたが、『手つきり姉さま』（五戸）の話が一番感情豊かでイメージがよく出ていると判断した。そこで、その話を基本にして再話を試みることにした。

まず、「桃太郎」が日本においてどのように伝えられてきたかを、柳田国男『桃太郎の誕生』、石田英一郎『桃太郎の母』を読みなおすことによってつかんでいく。このなかで彼は、「『桃太郎』は明治以後たった百年の間でもこれだけ多様に変化しているということは一体なぜだろう。私は、その大きな原因として、文学的な形象の問題があるのではないだろうかと思しました。……………」『桃太郎』という話は、有名だけれども文学的に形象度が弱いのではないかと考えた。桃太郎自身の人物像がはっきりしていないのではないかと⁽¹⁷⁾と思いつくのである。

松居は、このあたりのところをやや詳しく次のように述べている。

「『桃太郎』という話を再話するには、まず桃太郎の性格や人物像をはっきりし、細部を一つ一つ確かめ、その上で話の筋をもう一度再構成するためにプロットをきちんと立て、イメージの空白部分を埋めていく必要があると考えるに至りました。なぜ桃太郎が不思議な誕生をしたのか、なぜ鬼ヶ島へ行ったのか、鬼とは何か、きびだんごは何なのか、宝物はどうなのかということをいろいろの面から、また類話を読んだりしながら考えていきました。例えば、桃太郎がなぜ鬼ヶ島へ行ったのかは、全くわかりません。民衆の間に語られている話でもほとんどわからない。しかし、何も理由がなくて桃太郎があれだけの冒険をするというのはちょっと納得できません。何かきっかけが

ある。……………今の子どもたちにそれを語る時には、そここのところのブランクは昔話の質をこわさぬ程度に埋めておくほうが物語のリアリティーを感じさせるのではないかと。昔の人にとってはある暗黙の了解ができたことが、今の子どもには納得できないことがあります。そうしたところを、あまり理屈っぽい形ではなく、昔話の語りの中でプロットを立てて再構成してみようというふうに考えました⁽¹⁸⁾

松居の再話過程をふりかえってみると、およそ三段階に区分できる。

まず、「民話の精神」への共感的な姿勢と、読み較べによる適切な原話の抽出がみられる。(第一段階)。しかし、これだけでは再話は成立しない。その後で松居は、先人の民俗学などの研究成果に学びながら、「桃太郎」における「民話の精神」の追求を行なっている。そしてそのあと、子どもが考えそうな素朴な疑問(たとえば、なぜ桃太郎が不思議な誕生をしたのか)を一つ一つあげて検討していき、「桃太郎」の意味づけを行なっている。そこで得た把握をもとに、文学的形象度に焦点をあてて「桃太郎」のイメージの空白部分(不明確な部分)を埋めていったのである。こうして、「桃太郎」に即しての「民話の精神」の追求が深くなされていくのである。教材論に即していえば、「教育内容」の把握の段階である。(第二段階)。しかし、それだけでは再話にならない。松居は、読者である子どもにも納得のいくように、意味づけを具体的な表現でおきかえている。この点が重要である。読者の納得性を追求していくことが、結局は、物語のリアリティーを生み出すことになるのである。(第三段階)

松居のばあい、こうした三段階をへて再話の完成がなされていくのである。

(2) 松谷みよ子の場合

松谷は自らの歩みとかかわって「龍の子太郎」の創作過程を『民話の世界』(講談社、1974年)にふれているので、それを中心に述べてみたい。

松谷は人形座に在籍中に「民話の会」の人々と交流する機会があった。「民話」との出会いをとおして、彼女は「日本について何も知らないのではないかと」という思いに襲われ、「民話を訪ねる

旅」に出てみたいと思うようになった。こうして、長野、秋田への民話探訪の旅に出かけた。このことをとおして、彼女は、「語りを聞くことの楽しさ、語りの中にこめられる人々の心、祖先とのめぐり合いをからだで感じる事ができた」⁽¹⁹⁾のである。このような体験が松谷の再話・再創造に強く影響している。

松谷は、川の氾濫をめぐる「村人の苦難の歴史」を知るにつれて、祖先の重みを実感するようになった。「土地にまつわる話には、祖先の重い吐息が語りこめられたものが多い」のである。だが、あまりにもそのようなものが多いのを知り、「『水との闘いの民話』というけれども、どこかでそれは、『水に耐える民話』になっているのではないかと疑問をいだくようになった」⁽²⁰⁾松谷は「耐える民話」を越える物語を求めて、旅を続けていった。

そこで「小泉小太郎」の話に会う。それは「食っちゃあ寝の小太郎」の話だが、それだけで終わっていた。ところが山を越えた松本では、小太郎が成長し、母の籠に乗って山を切り拓き、平野を拓いたという話があった。松谷は、「食っちゃあ寝、食っちゃあ寝の小太郎はやはり大事業をなしとげたのだ」と実感し、「民話の新しい主人公として、小泉小太郎を日本の子供たちの中によみがえらせたい」と決意して「籠の子太郎」を書いていったのである⁽²¹⁾それは一地域のというよりも、日本の典型としての太郎をめざしている。

このあたりのことを、松谷は次のように述べている。

「籠の子太郎がかたちづくられていくなかでの問題点は、籠の子太郎が小泉小太郎という信州の物語を芯としながら、秋田からも想をとり、日本のさまざまな民話を組み合わせていることである。小泉小太郎から籠の子太郎への過程は、信州の太郎から日本の太郎へという典型化の過程でなくてはならない。ある土地の『舌切り雀』を再話するとき、それはあくまでもある土地の舌切り雀であると同時に日本の舌切り雀の典型でなくてはならない……のではあるまいか」⁽²²⁾

いわば、日本各地に伝承されている「祖先との合作」なのである。この点で特徴がある。「籠の子太郎」の構想を粘るうえで、松谷も柳田国男

『桃太郎の誕生』などを読み、塩田の小泉小太郎と松本の泉小太郎は元は一つだと確信した。

松谷は秋田の民話を調べていくうちに、「三匹のイワナをひとりで食べたため龍になった」という伝承にひかれた。この話をもとに、太郎の母がなぜ龍になったかを設定していった。そこには、松谷自身が体験した悪阻（つわり）の苦しさが反映している。松谷は、「この悪阻というものの、男性には無縁のものだけれども、女性にとっておおかたは避けることのできない業のようなものである。……太郎の母が三匹のイワナをたべる必要性をそこにおくことによって、貧しさの、さらには底辺にある女性の哀しさを据えてみたい」⁽²³⁾と述べている。自己の体験をもとにして「民話の精神」を発見し、それを依りどころとして再話・再創造するというこのような発想は、松谷の場合によくみられる。現代に生きる自己の生活体験・人生体験をもとにして再話・再創造の納得性・必然性を追求し、空白部分を埋めていくのである。⁽²⁴⁾

空白部分についての構想がこうしてできあがると、次は、それをどう表現するかである。これに関わって松谷は、次のように述べている。

「対象によって文体が変わるとはいえ、昔話の再話には、おのずからふさわしい文体がある。それは祖先から語り継がれた語り口を最大限に生かしながら、その作家独得のリズムを持ち、文学的にも密度が高いものでなければならない。／また再話の世界は文字で構築された文学とは異なり、目は文字を読んではいても、あたかもすぐれた語り手の語りを肉声で聞くような感動をとまう、ある意味では演劇的な世界が要求されるのではなからうか。／この場合創作と異なるのは、創作が独創性を要求されるのにたいし、再話は結果的には独創的な効果をあげながら、かつ、話者の語りのすぐれた部分に、再話の文章をむしろ積極的に沿わせていくことである。これは再話の持つ大きな特徴ではなからうか」⁽²⁵⁾

こうして松谷は、たとえば声喩を駆使しながら、できるだけ語り手の口調に近いような表現でそれをあらわしている。これは、松谷再話の大きな特徴である。

松谷の再話・再創造過程をふり返ってみると、基本的には松居直の場合と同じだといえる。すな

わち、まず、「民話の精神」への共感的な姿勢、探訪にもとづく原話の抽出・構想（主として「探訪にもとづく」という点が松居の場合と異なるであろう）がみられる。（第一段階）。そのあと、原話における「民話の精神」の意味づけを自分の体験にもとづいて行なっている。（第二段階）。最後に、それにふさわしい語り口でまとっていくのである。（第三段階）

松谷における再話・再創造の特徴は、一つには、女性としての彼女の人生体験をもとに「民話の精神」の発見・とらえ直しを行なっていること、二つには、すぐれた語り口への共感とその意識的・創造的な適用を行なっていることにある。そうすることによって、松谷再話の独自性が生みだされているのである。

(3) 西郷竹彦の場合

西郷竹彦は「民話の会」の活動に早くから関心を持ち、それに関わってきた。そうした民話研究と児童演劇論に強い影響を受けて、自らの文芸学と文芸教育論を構築していったのである。⁽²⁶⁾したがって西郷における民話の再話・再創造は、「民話の会」の精神に学びながらも、文芸学的関心にもとづいて実験的に試みられたものが多い。その足どりは、彼がいく度も再話し直した同一テーマの民話をみればよくわかる。以下では、「さるかにばなし」の再話を例にとって西郷の再話過程をみてみたい。

西郷の「さるかに」再話には、「さるかにかっせん」（『教室の民話、初級用』国土社、1958年。以下、初版とよぶ）、「さるかにばなし」（『文学読本はぐるま』部落問題研究所、1969年。以下、改訂版とよぶ）、「さるかにばなし」（『文学読本はぐるま』改訂版、1975年、および『文芸読本ぶんげい』明治図書、1977年。以下、第三版とよぶ）の三つがある。

三者とも単なる仇討ち話ではなく、「生産者の視点」に立って、「カニの労働と、その労働の結実をぬすみ、そのうえ暴力によって、理不尽にカニを殺してしまうサルの本質をえがいている」⁽²⁷⁾点では共通である。つまり、「生産者の視点」に立っての、「さるかに」における「民話の精神」の把握という点では共通なのである。だからこそ、さる

は子にたちに殺されなければならないのである。

しかし第二版、第三版となるにつれて、個々の表現と構成においてかなりの違いができてきている。さるがかきを横取りする場面を取り上げて、検討してみよう。

一つには、民話特有の語り口としての声喩・擬態語をふんだんに取り入れていることである。初版では「かきの木にのぼって」とあるのが、第二版では「かきの木にがきがきとのぼって」と変わっている。同様に、「かきのみをちぎって」が「かきのみをひとつもぎふたつもぎして」となっている。

二つには、場面の遠近関係、人物の形象関係がよく見えるような表現となっていることである。初版では「さるが……………山からおりてきました」とあるのが第二版では「山からおりてやってきた」、「まっかにうれた」は第二版では「うまそうにうれた」になっている。さらに「かには木にのぼれないので……………たのみました」とあるのが、情景描写を詳しく、「下からながめておったが、いつまでまってもかきのみをくれないものだから」が付け加えられ、また最後のところが「たのみこんだ」となっている。

第三版になると、第二版における声喩・擬態語、場面の遠近関係、人物の形象関係の豊かな描写を引き継ぎつつも、人物の視点設定がその上に加わってきている。つまり、これまではただ単に「さる」「かに」という呼称だったのが、第三版では「あかつらのさるのやつ」「かにどん」と変化している。つまりある意味では、読者が「内の目」でかにに同化しやすい設定になっているのである。しかも単に「取ってくれ」とたのみこむのではなく、「おらあのかきのみ」というように「かにかきの関係」を明確に出している。その上でそれと関わって、さるの側からみた「さるとかきの関係」をさるに語らせている。こうして「内の目」で「かにどん」の視点に立った読者に、その言い分の是非を判断させようとしているのである。

西郷の再話の変容過程を振り返ってみると、特徴の一つには、「民話の精神」としての「生産者の視点」は一貫しているものの、声喩や遠近関係・形象関係に立った豊かな描写をしだいに折り込み、読者がより表象化しやすく、納得しやすいよ

うにしている点がある。⁽²⁸⁾その背景には、西郷の「関係認識・変革」の文芸学理論がある。二つには、文芸学の理論にのっとって作中人物に視点設定をもちこむという、民話の再話に実験的試みを行なっている点である。西郷のばあい、このような試みはいくつか見られる。⁽²⁹⁾

(4) 再話の方法

木暮正夫は、再話の技法として次のようなことをあげている。⁽³⁰⁾

- ①既に再話されたものから再話しない。
- ②すぐれた採集原話をさがしだす。かけている部分は他の地方のものから補い、本質のものと無縁な夾雑部分はカットして先祖たちがほんとうに心の糧とした伝承の姿を復元して伝えるよう心がけたい。
- ③再話が創造であるためには、発見がなくてはならない。いくらすぐれた原話を選びだしても、その原話の本質を読みとって自分をはいりこませることができなければ、単なる書きかえである。
- ④語りの文学である民話には、独自の語り口が生きている。民話のもつ豊かなことばとそのテンポやリズムをどう生かすかも、再話のポイントとなってくる。
- ⑤方言をどうするか。方言は生かしたいが、方言を全面的におしだしては読者がとまどう。地方の原話を普遍的なものに再話するとなると、「共通方言」をつくっていく必要が生じる。
- ⑥民話には独特の文体（表現方法）がある。その文体はテーマの核心に向かって、一直線に語り進められ、焦点は主人公の動きにのみ絞られている。周辺のコまごまとしたことには触れず、無用な説明もしない。これが方言のもち味とあいまって、民話の魅力となっている。再話にもこの文体を生かさなくてはならない。

木暮の指摘の多くは、これまでみた松居、松谷、西郷の再話・再創造過程から実証できる。これらのことは、教材研究や授業構成にあっても大いに留意すべきことだと思われる。以下では、これらのうち「民話の精神」の発見、文体（人物像）の二つに絞ってさらに深めていくことにしたい。

4 再話における「民話の精神」の発見

吉沢和夫は「どのような民話をどう評価するか」⁽³¹⁾という論文の中で、民話を、「まともな」民話、「まともでない」民話、「まともでもまともでもない」民話の三つに分類し、どう評価すべきかについて検討している。

吉沢自身は明確な規定をしていないが、「まともな」民話とは、「教訓」ないし「民話の精神」をまっとうな形で含んでいるものである。この種の再話には「教訓」的・「道徳」的解釈もかなりあり、それをどう評価するかが問題である。⁽³²⁾「まともでない」民話とは、「怠け者」や「不正直者」が機知をはたらかせて勝利を得るといような、一見すると非教育的・非道徳的な民話で、「徳目主義からはタブーとされる民話」である。「まともでもまともでもない」民話とは、ナンセンスの要素を含んでいてとにかくおもしろいのだが、一体どういう意味があるのか一見するとさっぱりわからない民話である。

吉沢の「まともな」「まともでない」という言い方には若干の抵抗があるが、大きく言えば三つに区分けできることは確かであり、類型化の視点としては有効であろう。要は、それぞれの類型における「教訓」ないし「民話の精神」をどうとらえるかである。それによって、同一テーマの再話でも、子どもに訴える文学的・芸術的価値に大きな違いがでてくるのである。以下では、対照的・特徴的と思われる再話をとりだし、主としてそれらの比較検討をとおして「民話の精神」をさぐっていききたい。⁽³³⁾

(1) 「まともな」民話の検討

「かさこじぞう」は、貧乏だが正直で人の良い老夫婦が、正直で親切であったために、幸福が二人にもたらされるという話だとされ、「まともな」民話の一つに入れられてきた。このような位置づけのために、正直や親切が無条件に強調されたり、徳目的な教訓を教えることで終ることも多いように思われる。しかし、この種の民話にはこのような抽象的・表面的な教訓ではなく、もっと奥深いものがあるように考えられる。対照的な描き方がされている浜田広介「かさ地蔵」⁽³⁴⁾と岩崎京子「か

さこじぞう」⁽⁹⁵⁾を比較検討しながら、このことを考えていきたい。

時は大みそかの晩、福をもたらすのは石の地藏という点が両者に共通している。しかし、町に行く途中にかさをかぶせるか、町からの帰り道にかぶせるかという点、地藏からもたらされる宝が「米のもち、あわのもち、みそだる、にんじん、ごんぼ、だいこん、かます、おかざりのまつ」であるか、「金銀」であるかという点が大きく違っている。その他、テーマとかかわって重要な労働の位置づけが大きく異なっている。

○冒頭部分

(浜田) むかしむかし、ある所に、じいさんとばあさんが、ふたりぐらしをしていました。

(岩崎) たいそうびんぼうで、その日、その日をやっとくらししておりました。

(浜田) では、老夫婦の生活状態がよくわからない。これに対し(岩崎)では、老夫婦の暮らしぶりが、「その日、その日をやっとくらす」ほどの「たいそうびんぼう」だとわかり、イメージしやすい。老夫婦がこれほど貧乏だということが、筋の展開のうえで重要な要素となっている。

○正月の用意を考える場面

(浜田) 町まで行って、なにか、さかなを買ってこなくちゃなるまいよ。

(岩崎) 町さもっていったらお金にかえられんかのう。

(浜田) の「買う」という表現には生活の重みを感じられない。(岩崎)のように「か(換)える」とした方が、民衆の「素朴さ」を表現できるように思われる。

○正月の用意のために労働を行なう場面

(浜田) [記述なし]

(岩崎) さんざら、すげをそろえました。ふたりしてせっせとすげがさをあみました。

(岩崎) では、老夫婦が協力してあみあげたことによって、そこに福の到来が暗示されており、筋の展開の納得性・必然性を読者に感じさせる伏線となっている。

○かさを売る場面

(浜田) [記述なし]

(岩崎) けれども、だれひとり立ちどまる人はありません。

(岩崎) のように、一生懸命売り込むのだが暮れで売れない状況を書きこむことによって、きびしい状況と、帰りを待っているばあさんを思いやるじいさんをイメージ豊かに想像できるように思われる。

○地藏にかさをかぶせる場面

(浜田) 「よしよし、かぶせてあげましょう」じいさんは心に決めて、町までいそぎました。

(岩崎) 「そうじゃ。このかさをかぶってください」じいさまは、売りもののかさを、じぞうさまにかぶせると、

(岩崎) の場合、売れば金になるかさをかぶせた点にじいさまのやさしさが感じられるのに対して、(浜田) の場合、かさを買ってまでなぜかぶせなければならないのかわからない。話の筋が不自然であるように思われる。

○じいさんが外から帰ってきた場面

(浜田) 「あれまあ、さかなは売り切れかい」

(岩崎) 「おおお、じいさまかい。さぞつめたかったらの。かさこは売れたのかね」

(浜田) では、ばあさんの心遣い・やさしさが感じられないのに対し、(岩崎) では、正月の品物よりもじいさまのことを一番先に気遣っている。これによって、ばあさまの細かい心遣い・やさしさを感じとることができる。

○もちつきのまねごとをする場面

(浜田) [記述なし]

(岩崎) 「やれやれ、とうとうもちこなしの年こしだ。そんならひとつ、もちつきのまねごとでもしようかのう」

(岩崎) では、そうであってもせめて年越しにもちがあったらという気持と、それを深刻ではなく明るくまねごとで済ます様子がうかがわれ、読者はほのぼのとした気分になる。

○地藏が宝をもって訪れる場面

(浜田) じいさまとばあさま、ふたりは、こわくてなりません。すっぱりと、ふとんをかぶって、ふたりともふるえていました。

(岩崎) じいさまが思わず、「ここだ、ここだ」と、大声を出したら、歌声はぴたりととまりました。

(浜田) では、老夫婦と地藏との交流がぶっつ

りと断ち切れてしまい、地蔵の訪れる必然性がうすい。これに対し(岩崎)では、老夫婦と地蔵とのやりとりが加わることによって、じいさまの最初の行動が生きてくるとともに、地蔵が訪れる納得性・必然性が感じられる。

◦地蔵がくれた宝の描写

(浜田) ふくろの中には、金貨と銀貨がぎっしりとつまっていました。

(岩崎) のき下には、米のもち、あわのもち、のたわらが、おいてありました。

老夫婦の望みはよい正月を迎えることである。金銀をほしいと思ったのでも、ぜいたくをしいと思ったのでもない。(岩崎)では、いっしょにかさを作るという老夫婦の労働が、正月を迎えるための品物として老夫婦に戻ってくるという、労働の原則のようなものが感じられる。

これまで、部分に分けて両者を比較検討してきた。同じ素材でありながら、その中に込められた再話者の思想はずいぶん違う。再話の仕方によって、作品の主題・思想は大きく変わってくるのである。

(浜田)の方は、「金」という表現が目につく。老夫婦の正直・親切は、労働と夫婦仲の良さに支えられたものであった。だからこそ地蔵にかさをかけてやる必然性があるのであり、だからこそ福が訪れるのである。(浜田)では老夫婦の労働が語られず、金の納得性・必然性がとぼしく、民話のリアリティーがうすれてしまっている。もっと生活・労働が語られれば、正月の品物の方に納得性・必然性がいくはずである。民衆のほんらいの願いは金ではないだろう。金が出てくることによって、祖先の願い＝「民話の精神」から遠ざかったような気がする。民話が本来もっている心を表現し読みとらないかぎり、「民話の精神」が継承されないし、民話を現代に生かすことにはならないのである。

(2) 「まともでもまともでなくもない」民話の検討

ここでは岩崎京子「かもとりごんべえ」⁽³⁶⁾、西郷竹彦「かもとりごんべえ」⁽³⁷⁾、坪田謙治「権兵衛とカモ」⁽³⁸⁾を比較検討することで、この種の「民話の精神」を究明したい。

これは、かもを一度に百羽とろうとしたごんべえがひょんなきっかけで次々と事件に出くわすという話である。テンポの早さと事件のおもしろさに引かれるが、とりたてて深い意味は見い出せないように見える。民話教育からすると、何か物足りないと思われる点もある。そこから、一方では教訓的・道徳的なものを盛り込もうとするし、他方ではそれ以外の何かを見い出そうとする。

岩崎再話と西郷再話——以下、(岩崎)(西郷)と略記——の筋はほぼ同じで、次々と事件がおこるのだが、坪田再話は「ごんべえ」が途中でカモになり、今までの罪を悟るという展開になっている。

(岩崎)(西郷)は、その時々状況に立ち向かっているごんべえを見つけることができる。例えば、「あわばたけに落ちる」場面では、

(岩崎) あわばたけにおちてしまった。おかげで、あわはめちゃめちゃ。「すまんこって。はたらいてかえします」。ごんべえははたけのぬしにあやまった。

(西郷) おちたところがなんと、あわのくには、あわじしまのあわばたけのあわのなか。あわくったというのはこういうときかね。しかたがない。わしは、おひゃくしょうにやとわれた。

と書かれている。(岩崎)では遭遇した状況に対して労働によって償うという姿勢があり、(西郷)では開き直りの姿勢がみられる。いずれも状況に流されるだけではない。遭遇した状況を自ら判断し、どう生きるかを「ごんべえ」自らが示している。同様なことは、次にあげる「あわのほにはじきとばされて、かさやに落ちる」場面でも言える。

(岩崎) ごんべえのついたところは、かさやのわの、ほしたかさのうえだった。

「おやおや、あめがふればかさやうれるのになあ。人げんがふてもしようがない。」

かさやがあきれていった。

「すみません。こわしたかさはなおします。」

(西郷) みると、下はどこやらのくにの、どこやらのかさやまちだった。

こんなところはいやだといってみたって、

いまさらどうなるわけでもなし、ええどうにでもなれとかくごをきめて、そこにおっこちることにした。

特に（西郷）には、「いまさらどうなるわけでもなし、ええどうにでもなれとかくごをきめて」というように、彼自ら状況のなかに飛びこんでいこうとする姿勢さえ感じられる。

それに対して（坪田）では、「自分は、九十九日寝てくらそうと、百羽も一度にとろうとした。そのバチがあたって、とうとうカモになったばかりか、ワナにまでかかって、自分がカモにしたと同じようなめに、あうことになった。悪いことはできないものだ」と後悔し、涙を流す。涙がもとでどんべえはもとの人間にもどる。そして、「これでもうカモとりをやめて、正直なしんせつな、やさしいお百姓さんになったということでありませう」と結んでいる。

これでは、動物愛護の教訓が前面に出すぎている。どんべえはカモをとることによって生活の糧を得ていたし、「一度に百羽とる」という発想もそこに根ざしていたと見られる。だとすると、本来は生活のための動機から始まった話が、罪を悔い、「正直なしんせつな、やさしいお百姓さんになった」のでは、実生活からかけ離れた教訓に終わっている。「テンポの早さと事件のおもしろさ」で民衆をひきつけ代々と語りつがれた話が、おもしろみを抜きにされ、あまりにも安易に徳目的に語られている。言ってみれば、「まともでもまともでなくもない」民話が教訓話に変質させられているのである。

この点では、（岩崎）の方が「テンポの早さと事件のおもしろさ」を自然に読者に与えていて好ましいし、生活のリアリティーも感じられる。同じ話であっても（岩崎）は、「まともでもまともでなくもない」民話となりえているのである。

しかし、そこでの「民話の精神」は明確には表現されていないように思われる。吉沢和夫もいうように、「こういう種類の民話への理解を的確にすること」は「必ずしも容易なことではない」、「だからこの種の民話を再話するとすると、よほど方法論をしっかりとっていないと、前述したような筋だけに流されてしまいがちになる」といってよい。⁽³⁹⁾

この点で（西郷）は、「民話の精神」を前面に出し、それをもとに再話している。（西郷）における「どんべえ」の描き方は変わっていて、第三者的な描き方ではなく、「内の目」でどんべえ自らに語らせるという形をとっている。そこには、次のような西郷なりの実験的な意図があるのである。

「わたしは、主人公を翻弄する運命の『いたずら』を第三者の『外の目』で物語るというだけでなく、主人公その人が、外から彼をつき動かす『運命』というものに対して、外からどのように対処したか——その内面の真実をも主人公の『内の目』をとおして描きだしてみたいと思ったのです。

はじめはただ、状況に流され動かされるだけの人間がやがて自分を動かし、流すその状況に身をまかせながら、しかし状況ののっていくような主体性をいつか生み出しているともいった姿を『内』と『外』からはさみうちにして、とらえ描いてみたかったのです。……………

人間も一どならず、二ど三ど『運命』あるいは状況のなかへはじき出されることになれば、さすがに自分というものにもいくらか自信のようなものができて、とにもかくにも、状況に身をまかせながらまた流されながら、しかもそれを利用して『京の都の人なか』へ泳ぎでようといったこんたんをもってくるようです。もっとも、それも常にうまくいくとはかぎらず、さいごのところでもないところへひっかかるといったところに人生のしかたなさや、おもしろさがあるように思うのですがどうでしょうか。』⁽⁴⁰⁾

西郷は「どんべえ」の主体的生き方の芽ばえに重点をおいて「意味づけ」し、その「意味づけ」にしたがって「どんべえ」の内面がよくわかるように再話したのである。こうして、この種の民話の「意味づけ」が見事になされたのである。

(3) 「まともでない」民話の検討

「まともでない」民話では、「怠け者」や「不正直者」が機知を働かすことによって勝利を得る。このような反教訓的な民話にはどのような教育的意義があるのか。ここでは、「吉四六話」⁽⁴¹⁾をとりあげ検討していきたい。

はじめに話の筋をのべておく。

吉四六は、日ごろ柿を一つもくれぬ父親から「かきの木を見ちよれ」と言われ、村の子ども呼び集め柿を食べる。その言い訳に、「よう見ちよった。見ちよる前で、村のわかいもんが来て、次々と柿の木に登ってなあ。そうして、みんなもいでいってしもうたんじゃ。よう見ちよったけんまちがない」と言うのである。

武士が川のわたしもりの吉四六のところきて、船代を六文にまけるようにいう。吉四六は川の途中で、「ここままで六文じゃ。あいすまんが、ここでおりてくださらんか」という。びっくりした武士が「そりゃこまる」というと、吉四六は元の場所にもどり、「おさむらい様、行きが六文、もどりが六文で十二文になりますわい」というのである。

このような話が続くのである。このようにして吉四六は、その場その場で機知をうまく働かせて勝利を得ているのである。

吉沢和夫は、このような反教訓的な民話には次のような規則性があると述べている。

「怠け者が幸福をうるなどの『反教訓』的な話の場合は、だいたいすべての領主、地主等、支配者との関係において語られている」し、「その逆の教訓的な話の場合には、いわば仲間同士との問題が中心に語られている」のである。「ここに民話における教訓の階級性とでもいいうるものがうかがえるのではなからうか」⁽⁴²⁾

「吉四六」話もこの規則性に合致している。かれの機知で服従させているのは、父親、武士などであって、彼と同等またはそれ以下のものは含まれていない。父親も、子どもの吉四六にとって支配者だったのである。このような規則性を知った上で、この種の民話を理解することが大切である。この種の民話の主人公は、吉四六である前に民衆であったと思われる。つまりいても、ころんでも、けたおされても起きあがって生きていく人物、困ってもよくよしない行動力をもった人物として、民衆の知恵の伝統のなかで育てられてきたものである。吉四六は、民話の世界に生きる民衆の分身であったのである。この民話で大切なことは、吉四六の生活が一般民衆のレベルと同じように貧しいということと、貧しさのなかで生き抜く力となるのが彼の知恵であるということである。しかも、

その知恵は特別な神秘的な能力ではなく、一般民衆の常識程度のものであるということである。そして、常識の裏をかくことで成功していることである。これらのことを考慮に入れると、吉四六のとんちは、民衆の内側からでなければ笑えないものばかりである。こうしてみると吉四六話は、吉四六に託して語った民衆の知恵話であるといえよう。

5 民話における人物像の問題

ここでは角度をかえて、すぐれた再話の特徴を人物像にしばって述べてみたい。

(1) 人物関係の正しい把握

民話には、対比的な人物がしばしばペアで出てくる。両者の対比をとおして何かを訴えるのが多い。したがって、登場人物がどのような対比でどのように描かれているかという点が、すぐれた再話を見きわめる一つのポイントであるように思われる。すぐれた再話には人物像の描写の点ですぐれた対比がなされており、この点で文学的質の高さの一端を示しているといえよう。

吉沢和夫は坪田謙治の再話「大工と鬼六」における大工の描き方をとりあげ、坪田再話と原話の比較検討をとおして人物像の問題点をあげている⁽⁴³⁾。以下その場面をあげておく。

(坪田) 大工さんがおそろしく、口もきけないでいると、鬼はまたいいました。

「ここへ橋をかけたいんだろう」

「そうなんです」

大工さんは、おもわずそういってしまいました。

「だが、おまえさんのうでまえじゃ、ちょっと、かかりそうもありませんね」

鬼がいうと、大工さんはまた、

「そうなんです」

おもわずいってしまいました。

「それでこまっているんだろう」

鬼がまたいいました。

「まったく、それでこまっているんです」

こうなっては、大工さんはそういわないでおれませんでした。

「じゃ、ひとつ、この鬼のおれさまがし

んばいしてあげましょう」

鬼にいわれて、
「そうですか。橋をかけてくださるんですか」

大工さんがいいました。
「人間にとっちゃ、たいへんなことかもしれないが、おれさまのような鬼にとっちゃ、これぼっちの橋なんか、まず朝めしまえのしごとだね。おたのみとありゃ、あす朝はやく、ここにきてごらんなさい。ちゃーんと、りっぱな橋がかかっておりますよ」

鬼にいわれて、大工さん、なみだができるほどうれしく、
「ありがとうございます。しかし鬼さん、それはほんとうのことなんでしょうね」
そういいました。

(原話) この辺での名高い大工どん、お前は何を考えて居れやといった。大工は、俺は今度此処へ橋架けを頼まれたから、それでどうかして立派な橋を架けたいものだと思って、斯うして考えて居るといって、鬼は笑って、お前の目玉をよこしたら、俺がお前に代ってその橋を架けてやってもいいといった。大工は俺はいつでもよいといって、その日は鬼に別れて家に帰った。

坪田再話における大工は、鬼とのかけひきの場面で人物像がよく現われている。「大工さんは、おもわずそういってしまいました」「橋をかけてくださるんですか」「なみだができるほどうれしく」に見られるように、「おそろおそろ鬼の前に平服して、頭をびよこびよこ下げ、もみ手すり手で、ひたすら鬼の力に頼りすがろうとしているちっぽけな、無気力な、まったくたくましさの欠けた人間像」⁽⁴⁴⁾が浮かび上がってくる。しかし原話における大工はそうではない。鬼と対等に会話している。腕前に自信と誇りを持っており、鬼に無条件で頼まねばならないような弱々しい存在ではない。むしろ、鬼の挑戦を堂々と受けてたつ勇ましい存在としてあるのである。

坪田再話では大工の描き方が歪曲されている。それによって大工と鬼のかけひきがぼかされ、こ

の民話特有のおもしろさが消えてしまっている。こうなったのは、坪田再話では、大工と鬼の関係を正しく把握するよりも、事件の展開の筋をどうわかりやすく叙述するのかに力が入れているからである。しかし前者の正しい把握なしには「民話の精神」は消え去り、少しもわかりやすくないのである。

吉沢はこの点に関わって次のように分析し、指摘している。

「この昔話でいうと、橋かけの難問題 → 目玉のお礼 → 鬼の名前いいあて → 子供の歌のヒント → 解決、というのは昔話の筋書きである。この筋書きでいくかぎり鬼は大工の援助者、ということになり、大工は常に他によって救われる存在であり、したがって力弱い存在であり、主体性のない、行動力のない存在でしかないことになるだろう。だがもう一度この昔話をよくみてみればそこに主人公の行動によってささえられている論理のあることに気づくだろう。主人公と鬼は被援助者と援助者の関係でなく、対立した関係であり、この対立を軸として話は展開している。

……………こういう構造が民話特有の簡潔な語り口をとおして展開されている。不必要な叙景描写や主人公の思いいれは、かえってこの昔話の本質を描き出すのに妨げとなる。主人公の行動だけできびきびと展開させなくてはなるまい。またそうしないと、主人公の人間像もぼやけて中途半端なものに終わってしまうおそれがある」⁽⁴⁶⁾

このような把握は、すぐれた再話の選択・析出における有効な視点となろう。

(2) 「生活のリアリティー」の介在

善玉・悪玉に分け、全く典型的な描き方が歴史的になされてきたし、現在でもそうした描き方は多い。しかしそれでは、人間の真実は描けない。人間には完全な善玉・悪玉はいないのであって、両者の混合した場合がきわめて多いからである。したがって、そういう点を配慮したうえで人物の典型をつくりだし、それを対比的に描くことが重要である。この点に、再話者の力量が問われるのである。

たとえば、「こぶとり」における鬼とじいの関

わりである。もともと民話には民衆の生活が反映しており、それに根ざして「民話の精神」がきざきあげられている。したがって、「生活のリアリティー」を人物描写にどうもりこむかである。描写の仕方によって人物像が違って来るからである。

木下再話と坪田再話を比べてみると、この点で違いが明瞭である。⁽⁴⁶⁾

坪田再話では、筋を追うことにとらわれているせいか、「じい」の描き方が善良な人間そのものとなっている。これに対し木下再話の最初の「じい」は、「あまり人とつきあうこともしない、少しばかり変わったじいさま」であり、鬼どもを見たときにも、「ぶるぶると、うろの中でふるえておったが、ほんとのこと、生きたきもちはなかった」と表現されている。坪田再話にはこのような描写はなく、単に、「このありさまを見て、このコブじいさん、うたったり、おどったりしたくなってきたのです。それでつい、こううたいだしてしまいました」となっている。そのために、鬼どものおそろしさにもかかわらず夢中で出ていく緊迫感と、矛盾した人間像が消え去ってしまっているのである。

さらに、鬼どもがコブを取り上げる場面でも、木下再話では、

じいさまはどうなることかと思っておると、親方の鬼は、思いもよらんことに、「よし。すんなら、じじいのほっぺたについておるこぶをとっておけ。こぶには福がはいっとるというから、じじいもおしがるにちがいねえわ」

といったので、じいさまは、しめたって思っ、こぶをおさえながら、

「と、とんでもないこって。目でも鼻でもなんでもおらはさしあげますけんど、このこぶだけは。昔からおらのもっとるたいせつなもんを、そうむちゃくちやにとりあげられては、わあっ」と、さわいでみせておるうちに、大きな鬼はよってきて、

「さあとるぞっ」

といって、さっとこぶをねじりってしまったようだ。

となっており、踊りへの熱中からさめたときの「じ

い」の欲望にみちたふるまいを如実に描いている。坪田再話には「じい」のこのような側面は描写されていない。

こうして木下再話では人物の善悪を問題にせず、むしろ善の中に悪的側面を「生活のリアリティー」として持ち込むことによって、問題の焦点を「踊りのなかに夢中で入り込めるかどうか」に絞り込んでいるのである。こうした一見すると単純でない人物を設定することによって、「踊りの中に夢中で入り込めるかどうか」という点での鮮やかな対比を生みだしているのである。

おわりに

これまでみてきたように、民話（再話）の構造分析から多くの示唆を得ることができる。そこから、授業指導上のポイントを読み取ることができる。（民話ジャンルに特有なこととして）。民話の教材研究・授業構成にひきよせていえば、それは次のようなプロセスを必要とするといえよう。

- ①教材との自己対決
- ②「民話の世界」の追体験
- ③再話の比較検討による指導上のポイントの把握

これに類似したことが民話の再話・再創造過程にみられるわけで、教師はまさにそれと同等なプロセスを歩んでいく必要があるのである。それが実際にどうなされ、その結果どのような授業が展開されているかを、実践記録などで見る必要があるが、これについては今後の検討課題にしたい。

注

- (1)杉山明男「教材比判」、『現代教育科学』1962年12月臨時増刊号、25ページ。なお、同号は五大学共同研究の成果を報告したものである。
- (2)佐藤正夫「教授における思考過程と過去経験」、前掲誌、74～79ページ。
- (3)これに関わって西郷は、「教育における実験・研究はそれ自身がすぐれた教育でなければならない」として、「今後のわれわれの文学の授業研究のありかたとしては、教材研究の段階で、すくなくとも研究者、実践者として各自が教材としての価値を確認したのみを、できるかぎりよりよい条件と方法で教室にもちこむよう努力すべきであろう」と述べて

- いる。西郷竹彦「文学の形象とその読みとり—『最後の授業』をめぐる—」、『教育科学・国語教育』1965年7月号、5～6ページ。
- (4)小田切正「『かもとりごんべえ』—山内小学校二年国語の分析—」、全国授業研究協議会編『授業の集団化』明治図書、1968年、75～89ページ。
- (5)竹内常一『生活指導と教科外教育』民衆社、1980年、70～71ページ。
- (6)吉田足日「民話と文学—現代日本児童文学中の民話風創作を中心に—」、『幼年時代』11号、矢立出版、1980年9月、35～36ページ。なお、民話をふくめて戦後児童文学の発展をみる上で、日本児童文学者協会編『児童文学の戦後史』東京書籍、1978年、が参考になる。
- (7)萬屋秀雄は55年版小学校国語教科書を分析し、「かって多くあった徳目主義的童話的な昔話がほとんど姿を消し、民衆の願いを民衆のことで語りついできたすぐれた民話の再話、再創造の民話文学や創作民話が教科書にも登場してきた。これはまた、民間教育研究団体の実践・研究の成果であると共に、松谷みよ子、齋藤隆介、岩崎京子、木下順二などのすぐれた作家の民話作品の質の高さにもよっているのだろう」と述べている。(萬屋秀雄『現代児童文学教材の解釈と指導』明治図書、1981年、14ページ)。このことと関わって、『文学読本はぐるま』(部落問題研究所、1967～73年)の取り組みは注目値する。佐古田好一「人間の真実を学ばせるために—国語教科書・『はぐるま』攻撃に抗して—」、同和教育における授業と教材研究協議会編、『国語教科書攻撃と文学の授業』育木書店、1982年、を参照。
- (8)『教室の民話、初級用』国土社、1958年、における「民話の会」の紹介より。
- (9)民話の会編『民話の発見』大月書店、1956年、84ページ。
- (10)同上書、同ページ。
- (11)同上書、85ページ。
- (12)同上書、89ページ。
- (13)同上書、90ページ。
- (14)木下順二『日本民話選』岩波書店、1958年、における「あとがき」。
- (15)『民話』創刊号、未来社、1958年10月。
- (16)1970年以來「民話の研究会」がこれを継承する形で活動をすすめ、1978年より機関誌『民話の手帖』を発刊している。なお同会は現在、「日本民話の会」と改称している。
- (17)松居直『絵本をみる眼』日本エディタースクール出版部、1978年、253～254ページ。
- (18)同上書、256～257ページ。
- (19)松谷みよ子『民話の世界』講談社新書、1974年、16ページ。
- (20)同上書、36ページ。
- (21)同上書、39ページ。
- (22)同上書、64ページ。
- (23)同上書、59ページ。
- (24)松谷は「山梨採り」の再話をするたびに絶えず「民話」の発見をしたと述べている。松谷みよ子「『山梨採り』の再話についての覚書」、日本民話の会編『明日に生きる民話—再話についての覚書—』大月書店、1980年、118～132ページ。
- (25)松谷みよ子「再話の方法」、『明日に生きる民話—再話についての覚書—』、26ページ。松谷の「再話の文体」に関わっては、西郷竹彦「再話の文体」、『西郷竹彦文芸教育著作集』第19巻、明治図書、1979年、183～190ページが参考になる。
- (26)足立悦男「初期西郷理論の形成—『関係認識・変革』論への到達—」、『季刊文学教育』第22号、明治図書、1978年1月。
- (27)『教室の民話、初級用』43ページ。
- (28)西郷は「さるかに」における声喩の転換(ぐずぐず→ずぐず)に触れ、「『ぐずぐず』は、たくさん次の世代の誕生するこの場面にふさわしくありません。一方『ずぐずぐ』は、踏みつふされ踏みにじられても、そのものの足の下から立ち上がる民衆のバイタリティのようなものをみごとに表現します」と述べている。(西郷竹彦「声喩『ずぐずぐ』—『さるかにばなし』の再話—」、『国語教科書攻撃と文学の授業』、283ページ)。なお子どもからの発見として、横森サチ子「『かにむかし』を読んで思わぬ発見」、『子どもと教育』1982年5月号、92ページ、を参照。
- 民話の表現に関して、高森邦明は、西郷竹彦の「さるかにばなし」を取り上げ、「さるどん おらあのかきのみ、おらあにもちぎってなげてくれい」という「特殊な」表現では、「子どもに読みづらい」とし、「子どもにとって、よけいな負担をかけることになる」として、一年生としての「教育的配慮」を

すべきだとしている(高森邦明『児童文学と国語教育』鳩の森書房、1976年、73～77ページ)が、このような把握は民話(再話)の特質からいって問題があるように思われる。民話の表現はもともと語り口を生かしたものであり、子どもにとって楽しめるはずのものである。西郷や松谷の再話は語り口の文体・表現を積極的に取り入れて、視覚的にも民話(再話)の楽しさを実感させようとしてきたものである。したがって子どもたちからの反応を子ども自身から聞くことなしに、不適切だと思ひ込み、一方的に「教育的配慮」を強調するのは問題である。表現のおもしろさを味わわせながら、しかしどうしても読みにくくなれば、そのときにはじめて「教育的配慮」を考える必要がでてくるのであって、最初から「教育的配慮」を持ち出すべきではないと考える。

- ㉙後でも触れるが、西郷は『かもとりごんべえ』ポプラ社、1968年、でも新たな実験的試みを行なっている。吉沢和夫は、「西郷さんはいままで、一作ごとに、そうした方法論的な実験をだいたんに試みてこられた。こんどの『かもとりごんべえ』でも、一人称で語るという、従来の民話にはみられなかった特異な形式を用いて、原話にはないところの人生哲学ないし人生論といったものを激しくぶつけるといふ再話の仕方を試みられ、それはひとつの成功をおさめたと考えられる」(吉沢和夫『民話の再発見』大月書店、1974年、119ページ)と述べている。
- ㉚木暮正夫「民話の方法、ノンフィクションの方法」、『児童文学創作講座3、何をどう書くか』東京書籍、1981年、291～296ページ。ここでは要約してある。
- ㉛西郷竹彦責任編集『講座・民話と教育、第一巻、国民教育における民話』明治図書、1969年。
- ㉜教育的・道徳的解釈をめぐる学生の実態については、拙稿「1980年度前期『教育課程』(講義)の課題レポート『児童読物の比較検討』の分析」、琉球大学教育学部教育方法改善プロジェクト『教員養成のあり方についての総合的研究および施行』(第2年度)、

1981年。および、拙稿「大学の授業における教育内容論の教授——『民話教材の比較検討』をとおして——」、『琉球大学教育学部紀要』第25集、1981年を参照。

- ㉝民話の比較検討を試みたものに次のものがある。小松崎進・小松崎多津子「民話絵本の見かた考え方」、岩沢文雄・小松崎進編『民話と子ども』鳩の森書房、1970年。万屋秀雄「民話の評価と教材化の視点」、『季刊教室の民話』第1集、明治図書、1976年3月。松崎公男「民話を教材にするとき——どのような再話を選ぶか——」、『季刊文学教育』第21号、鳩の森書房、1981年9月。
- ㉞浜田広介「かさ地蔵」、『世界民話の旅、9』さえら書房、1974年、283ページ。
- ㉟岩崎京子「かさこじぞう」、『文芸読本ふんげい』第3巻、明治図書、1977年。
- ㊱岩崎京子「かもとりごんべえ」、『あたらしい国語一年下』東京書籍、1980年度版。
- ㊲西郷竹彦『かもとりごんべえ』、『むかしむかし絵本19』ポプラ社、1968年。
- ㊳坪田譲治「権兵衛とカモ」、『日本むかし話集(一)』新潮文庫、1979年。
- ㊴吉沢和夫「『かもとりごんべえ』の再話の方法」、吉沢和夫『民話の再発見』120～121ページ。
- ㊵西郷竹彦「語り手自身の体験を語る一人称の形式」、『かもとりごんべえ』ポプラ社。
- ㊶瀬川拓男「吉四六話」、『小学校国語、四年下』光村図書、1980年度版。
- ㊷吉沢和夫「民話とは」、吉沢和夫『民話の再発見』10ページ。
- ㊸吉沢和夫「民話における人物像——『大工と鬼六』の再話の方法——」、吉沢和夫『民話の再発見』。
- ㊹同上論文、110ページ。
- ㊺同上論文、116ページ。
- ㊻木下順二「こぶとり」、『日本民話選』所収。坪田譲治「こぶとりじいさん」、『日本むかしばなし集(二)』所収。